

# いま日本の教育を考えるⅢ

畑島 喜久生



いま日本の教育を考えるⅢ  
もくじ

## 第一章 いま在るべき教育について考える

- 1 「教育は、国家百年の計」といわれていることの意味を考える…………… 7
  - 2 教育とは、市場原理による商取り引きではない！（あつてはならない！）…………… 22
  - 3 教育の施策においては、何がな~~じ~~んで、何がな~~じ~~まないか…………… 30
  - 4 教育においていちばん大切なのは、「現場」であるということ…………… 34  
——「オラが先生」といわれる教育をこそ！
  - 5 プリンシプル（原則）の大切さを忘れてはならない…………… 50  
——わたしの教育原則
  - 6 ものごとは「基礎・基本」が大事…………… 61  
——最新の脳科学的知見と、経済経営の実践哲学から
  - 7 教育というときの「不易流行」とは何か!?…………… 80
- ## 第二章 現在<sup>いま</sup>というときの教育の実態は!?
- 1 教育をする、ということ（とき）の主役は誰なのか!?…………… 90

2	公立学校の限界について考える……………	98
3	「公立」義務教育学校の教師はいかにあらねばならぬか また政府や行政は、それをいかにして支えていくべきか……………	III
4	アメリカニズムのグローバルゼイション如きに、 日本の教育は惑わされてはならない……………	119
5	フィンランドの教育は、日本型の教育がモデルだった……………	133
6	いま少子化のなかでの子育てとは……………	141
7	教育者としての、わたしの二つの心の財産……………	154
8	それなり——人生を勝ち抜いてきたように……………	163
	——私立学校の生き残りをかけて!!	
9	時代遅れの者の弁と、その開き直り……………	171

### 第二章 さまざまな学<sup>まな</sup>びのなかから

1	経営者の資質とは!?!……………	178
2	「孫子の兵法」の教えるもの……………	186
3	中国の古典——老・荘の思想から「教育」について学ぶ……………	196
4	伊藤忠商事の商法（精神）を吸収する……………	208

5	「無私」を武器とする……………	216
6	「昭和の日」について思う……………	223
	——戦後を生きてきた者の <sup>しるし</sup> 徴として	
	あとがき……………	242
	追記……………	246

◎編集 佐田 満  
◎構成 佐田 満  
◎装丁 yuki  
◎画像処理 デザインオフィスはな  
◎コピー 宇田川森和

## 第一章 いま在るべき教育について考える

### 1 「教育は、国家百年の計」といわれていることの意味を考える

「政治や経済は壊れても、とりかえしはつくが、教育が壊れたらもうどうしようもない」といわれています。在るべき国家像の百年先を見据え、見通しをしっかりと樹<sup>た</sup>て、それを着実に果たしながら、国の繁栄を図っていかなければならない——そのときの基本になるのが教育である、といっているのだと思います。

明治六（一八六八）年から数えて、二〇〇八（平成二〇）年は、ちょうど一三〇年になります。昭和六四年に敗れたのが昭和二〇（一九四五）年で、いまから六三年前。明治維新以降のわたしたちの国の近代も、敗戦を期に大きく二つに分けられるのですが、そこでの辿ってきた歴史を考えてみれば、「教育は、国家百年の計」といわれている意味も、理解がしやすくなると思います。

ときに、ここにおいての「教育」にかかわっての「国家」の歩み、すなわち「歴史」については、わたし自身を基準に考えることにしたいと思うのです。日本近代の歴史を、敗戦を節目

に生きてきているからです。

わたしは昭和五（一九三〇）年の生まれで、わたしたちの国が世界中を相手どって戦った昭和六（一九四一）年の生まれで、わたしは昭和二〇（一九四五）年——わたしが一五歳のときでした。しかもナガサキで原子爆弾に被爆したりもしていました。……昭和六年、満州事変勃発。生まれた翌年です。あとそれが昭和一二年の日支事変に繋がり、そのときは小学二年生、太平洋戦争の始まったときは小学校（国民学校、初等科）六年生でした。ですから、一五歳の敗戦までは、丸々戦争を経験していることになる。堂々たる「軍国少年」だったのです。この国のために命を捧げる覚悟の、押しも押されぬ。

明治維新以降のわたしたちの国は、ヨーロッパ指向の「追いつけ、追い越せ」を合言葉にしての、いわゆる近代化の歩みだったと思います。それに「帝国主義」「植民地主義」が絡む。「日清・日露」の戦争、つづいてそれに第一次世界大戦を挟んで、日中戦争、太平洋戦争と拡大していったのは、西歐指向のなれの果て——。その間に、「国体主義」という名の「亡霊」が現われでる——。

「国体」を辞書で索くとこうあります。

「主権または統治権の所在により、区別した国家体制。「一の護持」（『広辞苑』）『軍国少年』であった者の感覚からすれば、天皇を中心とする軍国主義国家体制です。そして、この「国家の体面」「国の体裁」が異常な形で顕在——歪曲されたのが、一九三七（昭和一二）年の文部省に

よる「国体の本義」の教化普及。……つづいてはそれを、同じ辞書から索いてみます。

「一九三七年文部省が発行した国民強化のための出版物。記紀神話にもとづき国体の尊厳、天皇への絶対服従を説き、社会主義・共産主義・民主主義・個人主義・自由主義を排撃。」と。当時の世界情勢からするなら、ドイツ、ヒットラーによる「全体主義」の日本版といったところでしょうか。一九三七（昭和一二）年といえ、日支事変が始まった、わたしの小学二年生の時ですから、学校に入るとほぼ同時期に、異常な「国体思想」なるものに染めあげられてしまうことになる。そしてそれは、帝国主義・植民地主義の世界的な流れのなかでの日本近代化の必然であったのかもしれない。それが「国体」の名で神話化され、中国、その他への侵略戦争へと発展していくことになる。明治元（一八六八）年から、敗戦の昭和二〇（一九四五）年まで数えて、七七年。「国家百年の計」には、一三年足りないことになりましたが、ひとまずそこまでを、「教育の計」のワン・サイクルと考えてよい。そしてそれは見事に破綻した。結果的には「政治」も「経済」も0の状態に帰したことになった、といつてよいと思います。政治的にも経済的にも「軍事大国」といわれるところまでには発展してきていたのですが。

ところで敗戦——。0からの再出発です。それからしばしの時を経て……。

第一次高度経済成長といわれるものが一九五九（昭三四）年。そのつづきとしての第二次が一九七〇（昭四六）年。——そのことからすれば、経済は、ほぼ一五年で立ち直りを見せたこととなります。そしてその流れは二五年目の第二次に連なり、一九九〇（平成二）年のバブル

経済崩壊まで、右肩上がりといわれる名のままに続いていく——。

その間、<sup>かん</sup>「日本経済は世界一流だが、政治は二流」と対比的にいわれる、経済と政治との相互間の関係はあるにしても、二流の政治も、世界の先進国と肩を並べることができるところまでには、それなりの復権を果たしてきていた——そういつてよいと思います。

ときに「教育は、国家百年の計」といわれるその「教育」はどうか——。

「自由」「平等」「人権」「民主」「平和」と、人類史的な理念としての国家目標がミリタリズムの反動として樹てられていくことになるのですが、それらをベースにしながら直接には、「個性の尊重と——その伸長」が教育の指標になる。……ときにいま、六〇年余を経過して、そのことによってどんな結果が招来されているか——。

いまグローバルイズムという名の市場原理主義が<sup>おおはやり</sup>大流行です。アメリカン・スタンダードの経済合理主義万能の考えかたです。そして、政治や経済はそれでいいのかもしれない。しかし「教育」は否<sup>イナ</sup>。教育は「金」や「物」ではない。物々交換的商取り引きではありませんから。いったん失敗すると、立て直しがきかないのです。

わたしたちの国では、安倍内閣によって「教育再生会議」が立ち上げられ、「美しい国日本」「戦後レジーム（体制）からの脱却」のスローガンに沿って、教育の改革が<sup>はか</sup>諮られました。しかしこれは勘違いです。市場原理主義を考えかたの中心においているが故に。競争主義・効率主義・成果主義を根幹の基準にしていることからして。身近な戦後六〇年の歴史からも、「教育は、

百年の計」といわれているその教育の——長期的な確かな見通しの本義に叛そむいている。やろうとしていること、なそうとしていることが、凡て「拙速」と繋がっている、といつていいから  
です。

何を「美しい」とするのかは、よく分かりません。しかし「戦後レジーム」というときには、戦後民主主義体制、またそれと背中合わせの自虐史観等に見られる国家的な誇りの回復—復権が眼目であることは、よく分かります。しかし、それが反動であつてはいけない。「戦後の乱れ」という言葉に見られる、目に余る道義的頹廢の事実。「個性尊重」の大義名分による「公意識」の欠落・欠如。「自由」という名の責任放棄、規律無視の得手勝手、等々……。しかし、「自由」や「平等」、「人権」や「民主」、「平和」の理念自体が間違つていたわけではないのです。

仮に「愛国心」といわれても、わたしの**ばあい**、それに与くみしたくない。六三年前、「国体は護持したが、国民は放棄した」——そんな国家への不信の思いからするなら。しかし「愛国心」の強要と、自発的な「祖国愛」とは別。自分の親や家族、ひいては自らの生まれた故郷を愛する  
ように、国を愛めずる。それが自然の感情というもの。……六〇年という時間のなかでも、それほど国民感情はこみいつているのです。

こう考えていくとき、安倍内閣は本当には「戦後」が何であつたかなど、よくは分かつていない。だから戦後の否定的な側面だけを捉えて、それを市場原理の競争主義で括くくろうとする。これは浅はかな小児病的短絡思考、物事を一方の視点—観点からしか見ることのできない——

そんな類ないの。仮にもし保守主義とか、日本文化的な伝統回帰、といってみたとこで、そこには「和魂」といわれる「もののあわれ」「惻隱の情」等の情緒的感情にも思いは届いていない。表向きの戦後的デメリットへのアンチテーゼ。それを短兵急に仕上げるというのですから話になりません。単なる「目先の計」ではない。

こんなことをいうのが、ここでの目的ではありません。戦後六〇年かけて壊してきたものをどうやって取り繕うか——。これは至難むずの業わざです。経済や政治ならともかく、教育ばかりはそうはいかない。立て直すには、破壊した分のそれだけの時間がかかる。そう考えるべき、と思つてのことなのです。

「温故知新」という古い「論語」(為政第二)の言葉があります。故ふるきを温たずね新しきを知る、と読み下すのですが、孔子が「たずね」を「尋ね」としないで「温ね」としたのは、「アタタメタズネル」といったかったから——吉川幸次郎(中国文学者)の解釈によると「温とは、肉をとろ火でたきつめて、スープをつくること。歴史に習熟し、そこから煮つめたような知恵を獲得する。その知恵で以て新シキヲ知る」ということなのです。わたしの田舎(九州の対馬)で温あたためることを温ぬくめるといいますが、手の平に包いんで古いにしえを懐なつかかしみながら、新たなる時の息吹きを感受する——そういういいと思うのです。

話を元に戻すと、六三年前に思いを返し、敗戦国として一切の価値が転倒してしまふ——その冷厳なる歴史的現実を吟味し直し、新しく導入された価値のよさをも認識のなかに収めなが

ら、よきものは蘇らせ、悪しきものは吟味のうえ捨て去る。六〇年という客観化の時間のなかで、冷静にそれを行なう。別の表現でいえば、失くしてはならない（失くすべきでなかった）ものは蘇生させ、行き過ぎは厳しく糾す——滅却し去る。

戦後の教育については、占領政策下という条件下にあつて、勘違いや、取り違い、誤解、行き過ぎ、ズレ、ひずみと、いろいろさまざまデメリットがあると思います。あつて当然です。そしてそれら一つ一つを、六〇年間に煮詰めてきたスープの知恵<sup>ちえ</sup>によつて検証する。いろいろな意見がでてくると思います。さまざま考えかたがあるはずです。しかし、

広く会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ

と、明治元年、一三〇年前の「五か条の御誓文」にあるように、議論を重ね時間をかけて意見を集約し、民意にも幾度となく問い掛け、問い掛け直して、「国家百年の計」としての在るべき方向を探り当てていく。例えばつぎのように掲げる、いくつかのことなどについても。一つ一つを丹念に。ゆっくり、騒がず、時間をかけて。

○核家族化（の弊）については……

反語的にいえば、大家族制度の崩壊ということになります。そして、そのことによつて齎<sup>もた</sup>らされている結果の弊害として、たちどころに思い浮かんでくるのは、「少子化」の問題——これは教育の問題を超えて深刻です。また「家庭の教育力の低下」、「血の絆の希薄化」「家を媒体としての個<sup>こ</sup>と公<sup>こう</sup>との関係の曖昧化」等々と、きりがありません。終局には、戦後新しくつ

くられた「民法」をどうするかにいきつくのかもしれませんが。とそれは限りなく「人権」の問題と繋がりが、絡まって一筋縄ではいかない。「フェミニズム問題」また「同性者結婚の認知」といったこと一つをとってみても、これは全世界的な政治思想上の問題です。少なくとも「家夫長制」の復活など望むべくもないし、既に教育の範囲を越えている。ときにそれを「教育改革」の名で短絡的にひとからげにして、「愛の欠如」にかかわる心、の問題として括ったり、また教育力回復の強化策として「家族の団おやがく圓」をあげ、さらにはその具体策として「親学おやがくのマニユフェストづくり」を提起したりする。

……と、それは、「教育は、国家百年の計」といわれる「計」に値するか——。

○規範意識の低下（の弊）については……

人倫、道徳律にかかわってのことは、話は極めて分かり易いと思えます。（人間性の内面の問題、また戦時中における「国体主義」強制への国民感情の問題などの複雑さはありますが。）しっかりと決まりを守らせる。そのためには、「道徳」の時間をより強化し、そこでの授業を核にして規範意識を高めていく。家庭の教育力はいうに及ばず、社会全体で子どもを見ていく。……しかし果たして、それでことが済むのか。いやそれができるのか。

問題はこみいつているはずですが。いま「分かり易い」といいましたが、もしかすると、そう考えることのなかに落とし穴があるのかもしれない!?

そこでつづいては、規範意識の身に着させかたにかかわる、と思われる問題をいくつかと

りだし、それを元に「分かり易さ」の度合いの検証を試みてみることにします。

・幼児期における「躰」をどうするか。

いまの親に、果たしてそれができるのか。口でいうように。頭で考えているように。「躰」の成り立つ家族的な環境に、いま日本社会はあるのでしょうか。（それができないから、規範意識がますます崩れていく〔いる〕ということがある。）

・若者の我仮勝手、得手勝手をどう考えればいいのか。

若者といわず、それは社会一般化しています。そしてそれら傍若無人の不道德行為は、戦後教育のメインテーマであった「個性の尊重―伸長」とどのように結びついているのか。また人類的社会理念としての「自由」「平等」「人権」「民主」「平和」等とも。それらが戦後社会―教育の全てを覆っていた、といってもいいくらいなのですから。

・：：またそのうえで「個人」と「公」<sup>おおやけ</sup>の関係は？

戦後、いつの間にか「公序良俗」という言葉が聞かれなくなりました。元々は法律用語なのでしょうが、かつてには広く一般用語としても使われていたのです。それと「公衆道徳」――それこそは日常語だった。ところでいまその代わりとでもいうように「ゴミのポイ捨て禁止」などという、子どもっぽい言葉が飛びだし街中に氾濫している。これではもう漫画。……自の個があれば、他の個があるのです。であるのに、それぞれの個が、自らの個だけを突出させる。この自他関係の非さえ分かっていないのは、特殊な誰というより、社会一般の風潮そのもの：

…としてではないのか!?

・ 本当の「自由」とは!?

自由——これは人類窮極の理想・理念です。しかしこのことには、規則（規律）、ひいては責任が伴う。それが「常識」<sup>コモンセンス</sup>のはず…と、いうところの「規範意識」は、その「自由」とはバラレルの関係にあつて、そこに「公」や「個」が絡むことになる。一九九〇年代、アメリカの哲学者、ジョン・ロールズは「自由」について大意こういいました。「自由」を維持していくためには、「公正なる正義」と「公共性」が確保されなければならない。「良く秩序づけられた社会」の形成にはそのことが欠かせない——と。無原則な自由なんてあり得ないのです。ことは複雑——が、その複雑さこそを解きほぐしていかなければならない。これらの「自由」をいうときのプリンシプルにも思いを致さないで、「規範意識」の強化などとは絵に描いた餅。心すべしとってよい。

・ 「和魂」に思いを致したい

いままでいってきたことに、他者の心<sup>おもんばか</sup>を慮るという意の、慈しみの感情としての「惻隱の情」<sup>そくいん</sup>を加えると、東洋的心性ひいては日本人の思いの交わし合い、ということになると思います。江戸中期の国学者、本居宣長によって顕揚された「もののあわれ」、すなわち「源氏物語」による雅の世界での風雅的情趣を加担させると、よりもっと日本的——和魂に近くなります。「規範意識」に、日本人の感性の資質の陶冶という言葉を付け足すだけで、教育そのものの仕方——

方法論に潤いがでてくることになるのです。……ときに「惻隱の情」という「論語」の思想は、「武士道」の精神——その精髓ですらあった!!

○いま社会問題化している「いじめ」(の弊)については……

「義を見てせざるは勇なきなり」——これもまた孔子の『論語』(為政)による「武士道」の精神です。

ときにいま、日本人の心性をそのように変え得れば、「いじめ」などいっぺんに断ち切れると思います。しかし、しかし……。不干渉主義がいま、ミーム(文化的遺伝子)化しつつある。ミームといえ、大きな文化の流れの単位ですから、そのことの変化の意味は大きい。戦後六〇年経って、「武士道」も「和魂」も崩れ、というとき目を百年先に移して計を練る。二五〇〇年前の孔子の思想を省み、日本近代化の流れのなかでは、二三〇〇年前、ギリシアの哲学者アリストテレスによる人間観——社会観を振り返ってみる。「人間は社会的動物である」という、その「社会」の意味を。

(ここまできてやっと「教育は、国家百年の計」といわれる標題の意味が垣間見えてきたようです。そして「教育改革」というとき、必ずでてくるのが「愛国心」。——で、最後にそのことについても少し触れておきます。初めにいった「軍国少年」時代を戦前におくった、我が身の経験に照らしながら。)

○「愛国心」とは……

先祖代々、自分の生まれ育った国を愛する。これは当然のことです。そしてわたしもその後におちるものではありません。しかしわたしは、それを他人に押し付けられてやっているのではない。

こんなこみいった、物の言いかたをしているのは、多感な少年時代に「国体主義」という名の、国家から受けた心の傷がまだ癒えていないからです。わたしは、戦争にまつわる日本近代を否定的になど捉えています。戦後左翼の進歩的文化人といわれる人たちのように、戦争を「絶対悪」とする、というようには。でないと、自分の生きてきていた時代そのものの全否定になる。そんな無稽の論理には陥りたくないから。

しかしいま、「愛国心」の強制ということにかかわっていうときには、六〇年前に自分が生きていた（生かされていた）という自分の生を根拠にするよりない。一言でいうと、国体は残ったが国民は棄てられた。

「戦陣訓」は、「軍国少年」にとって神勅しんちよくに変わるもの。

「生キテ虜囚リョウシュウノ辱シメヲ受ケズ、死シテ罪過ザイカノ汚名ヲ残スコト勿レ」と、そうのだまいながら、そのご本人には自裁の覚悟すらできていなかった。その真似ごとはできても。そんな「中学生ぐらいの頭脳」(辰野隆)の男が、無暴な戦争を企たくらみ、「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」とうそぶきながら、「アヘンの密売で貯めた莫大な機密費」を使い、要人への付け届けをしているたという。(阿川弘之)二〇〇八年時に発見された日記によると、敗戦直前のころの国民の士気

のなさを愚弄してさえる。

のみならず、棄民といえば、「関東軍」と呼ばれ、当時飛ぶ鳥落とすとさえいわれた「陸軍」が、ポツダム宣言受諾の報を知るや、我れ先——いの一に満州から撤退する、いや逃亡する。多くの庶民を捨て置いて。

……そんな間で、わたしなど、食う物は全くない。食糧統制違反を犯し、芋泥棒<sup>芋泥棒</sup>をして、僅かに糊口を繋ぎ止める。自分の幼い量見と、親の助力で。実質、どんな国家の世話にもなった憶えがない。……こんなことを言ってもきりがありません。子ども心に、「この国は滅びた!!」——ほんとうにそう思っていたし、戦後三〇年経って、そこでの戦後の思いを『亡国——日記抄』として詩集にしたのも、そんな情念<sup>おもい</sup>から。だから、もし国が、国家として生き残るのであれば、一度亡び去って、「無」から出発すべし——と、そう思っていた。

しかし実際は、さにあらず、政治の季節<sup>政治の季節</sup>といわれる時代性のなかで、歴史は封じられた。そしてそれは、歴史の断絶<sup>断絶</sup>を意味している。全ての日本という国の歴史をチャラにしての。(その意味においては「一億総懺悔<sup>うそが</sup>」と嘯<sup>うそが</sup>いた敗戦時の為政者と、戦後左翼とは同じ。)しかしそう認識するのであれば、戦争のために命を滅<sup>めつ</sup>した軍人を初めとする多くの犠牲者たちの死をどう意味づけるか——。わたしが日本国の敗戦を「亡国」と捉えるのは、戦前の歴史を捨てたというのではない。国家の存亡にかかわる認識の問題——むしろ、継続<sup>つづ</sup>を意味する。恨み<sup>うらみ</sup>も辛み<sup>つら</sup>も含めて。その思いの間で、死者を弔う。死者を自らの歴史の反照とすること、<sup>無</sup>「無」からのい

ちを繋ぐ……。そしてそのとき樹てられなければならなかった「国家百年の計」は何であったか——。そしてこの命題に「教育は……」という主語を冠するとき、そこにはおとなの分思想性としての「右」も「左」もあつてはならないはず。……そのときから、六〇年経つていま、「教育の再生を」という……。

「教育は、国家百年の計」といわれるときそれは、反語的に拙速が禁であることを意味しているはずなのです。

具体的にいま現実の学校では「いじめ」が頻発し、保護者からのイチャモン（無理難題要求）に痛めつけられて、教員の精神疾患が激増している。ことは総じて悲観的なのです。傾向性トレンディイとしてはひたすらなる下向——。

しかしそうとばかりもいつてられません。人間の世界には、混乱があればそれとは別に「己れの分を持つじる」という者が必ずいる。そこに活路を見出す。実際、わたしの周りには、周囲のどんな混乱にも惑わされず、己れの分を守り通している「教師」たちがいっぱいいる。「学級崩壊」とも「いじめ」とも無関係の。ある教師は、「そんな暇などありません」とさえいつている。「イチャモン」については、わたしの所属している学校法人の二つの幼稚園においては、全く見られません。皆無といつていいほどに。

そして広く社会総体の意味においての、今という六〇年後の戦後の混乱・混迷状態についてもそれはいえるのです。少なくとも「家庭教育」においては。もとより、限られたものとして

はありますが。

「家訓」を守る、とまではいかなくても、儒教的もしくは武士道的なしきたりのなかで、それを守り通す。「和魂」を「家」の誇りとする階層社会は、間違いなくあって、それは仮空のこととしてではなく終始一貫守り通されてきている。

わたしは、一五歳のとき、ナガサキで原子爆弾に被爆し、死んでいてもおかしくない生き残りの一人ですから、そんな人間の感情からするなら、世の中がどれほど不確定、不確定であろうと、恐れ怖くことはありません。しかし、戦後すぐの一九歳のときから、五八年間、小・中学校・大学・専門学校と教師の仕事を生業としてきた者として、「教育」のことだけは気になる。自分如きがどう騒いでも、どうなるものではない、と思いつながらもお。……心がざわめいていたたまれない——これはもう習性なら……。（もしかすると、それを「愛国心」というのかも知れない。）

そしていま「教育は、……」というとき、政治家も官僚―役人も、学者―研究者も、現場の教師たちも、さらに広く社会総ぐるみで「……国家百年の計」に当たっていかなければならない、と、切に思う。声の大きい者の掛け声だけでは駄目なのです。国民みんなで、そう思うことによっては、今後の「教育」は展げていかない!!（のです。）